
関東管領職、越後の龍

麗蘭

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

関東管領職、越後の龍

【コード】

N3849C

【作者名】

麗蘭

【あらすじ】

日の国・東国越後。それを統べる関東管領・長尾景虎は、数多の戦を終え、本拠地・春日山城で疲れを取っていた。そんなある日、彼は侍女達から、ある奇妙な噂を聞き入れる。

序、西の龍神（前書き）

申し訳ありません。本文中で上杉 謙信は長尾 景虎と表してありますが、この時期では既に上杉謙信と名乗っています。作者のミスを、ここで改めて謝罪致します。申し訳ありません。今後は気を付けます故、これからも宜しく御願致します。

序、西の龍神

日の国・越後。

この地を治めし、長尾景虎こと関東管領が、齡三十を数えた頃。景虎の住まいである春日山城が、突然騒がしくなった。

「でもまさか…」

「いや、でもそうかもよ？」

今朝は侍女達がやけに五月蠅い。

これでは、やっと戦から疲れて帰って来たというのに、ゆっくり休める筈が無かるう。仕方ない。少し叱咤しておいたほうがよからうか。

「何事だ…？」

「「お、お館様！」」

侍女達はようやく景虎の存在に気付き、慌てて深く頭を垂れた。それを景虎は一声で制した。

「面を上げよ」

侍女達は主人の命に従い、そろそろと頭をあげる。

そんな侍女らに、景虎は眉間に僅かな皺を寄せ、いつもと変わらぬ声音で静かに問うた。

「今朝は何かと城内が騒がしいが、何事だ？」

景虎は小鳥の鳴く音が聞こえる、朝日の眩しい外を、窓越しから覗いた。

「いえ、それは…」

「少々申し上げにくく…」 景虎は困惑している二人を見下ろし、無意識に腕を組んだ。

着物の擦れる音がする。

「よい。申せ」

暫くして 侍女達はぽつりと語り出した。

「…ただの噂なのですが…。我が日の国・西の小国で、お館様を名

乗りし大名がおられるとの噂が……」

景虎の眉間にますます皺が寄る。

「わたしを名乗る？という事だ」

「はい……。なんでもその大名は、他国との戦で勝利後、必ずといってよい程、“我は西の越後龍なり”。こう申して引き返すそうなので御座います」

もう片方の侍女が、代わって口を開く。

「私もは、そのような大名の事など、今まで全く聞き入れなかった故……」

自分を無断で名乗られた事が害したのか、少し不機嫌そうに、再び尋ねる。

「して、その者の名は」

「確か……」

二人は顔を見合わせる。

やがて、一人がその名を口にした。

「聞いた話によると、多田ただ 蛮ばん崔さいと……」

「多田……。あまり聞かぬ名だな」

多田……。か……。

見過ごし難いが、暫く様子を見る事にしよう。

景虎は戦の疲れを癒そうと、再び自室へと引き返した。

頭上で、数匹の鳥が鳴いた。

序、西の龍神（後書き）

この度は、本作品を御覧下さり、誠に有り難う御座います。感想などが御座いましたら、是非とも評価お願い致します。

一、妻女山（前書き）

これはフィクションです。一部歴史に伴っていない場合がありますが、あらかじめご了承ください。

一、妻女山

越後・春日山城。

本日、長尾景虎が出陣なさる。

戦乱地は越後と甲斐を挟んだ川中島。御相手には甲斐の虎こと武田信玄。四度目の出陣。

世に言う、後の第四回、川中島の決戦だ。

景虎は、本日も出陣間際まで本堂に籠り、毘沙門天に願い入れしていた。

長い髪を兜で手早く纏め、戦支度を済ますと、景虎は愛馬に股がる。

多くの兵士と城を背に、景虎はゆっくりとおらんだ。

「我等が目指すは本日の上杉本拠地、妻女山！！宵には川中島だ！！！！そこで武田を迎え撃つ！！！！心してかれ」

才
才
：

景虎を筆頭に、上杉軍は妻女山を目指し出陣した。

一方その頃、武田の軍勢は、霧の中上杉軍より一足先に、妻女山に向かっていた。

しかし、頭の回る信玄の事だ。なんの策も無しに来る筈がない。

信玄は上杉の本拠地が妻女山だということを、送り込んだ忍びから聞き取ると、妻女山を囲み、二手に別れて上杉を挟み撃ちにしようと考えた。よって、今こうして霧の中を進んでいるのだ。

霧の中には、甲斐の虎率いる武田軍が、大軍となって上杉の本拠地、妻女山へと向かっていた。

「信玄様、敵の出が遅くはありませんか？まさか我等が出陣するの

が早すぎたのでは……」

武田家重臣、真田の大将、真田幸村が前方を走る信玄に声を掛けた。

「いや、それが相手の策やもしれん。我の読みを信じよ」すると信玄からは早口で、顔も向けずに返事が返ってきた。

「はあ……」

幸村は間の抜けた声を出し、先頭を走る信玄から、少し距離を置いた。

信玄の読みはこうだ。

忍びから聞き入れた情報によると、上杉が動くのは確か本日卯の刻だった。

ならばまだ時間はある。この間に、上杉より先に妻女山へ着き、待ち伏せしておく。

そしていざ上杉が着いた時になれば、襲いにかかればいい。

不意打ちだ。これなら上杉も混乱して、すぐには応戦出来まい。

万一を考え、二隊に別れて両側から攻める戦法をとった。

空に満天の星が輝く。

「よし……。ここで休憩だ。今日は霧が深い。それに相手はあの上杉だ。ゆっくり休んでおけ」

武田軍は、妻女山を前に、両隊とも各自の小さな山下で息を潜めた。

「武田が動いた……。止まれ!!」

妻女山の手前、小さな山を登った時、先頭の景虎がいきなり制止をかけた。

「お館様?どうなされたので……」

「あれを見る」

景虎は目前、少し離れた所の、妻女山の向こう側の山を指差した。全員がそちらを見やると、薄暗さに紛れて、二つの山から空高く天を昇る、灰色の煙が高々と立ち上げていた。

「あれは……？」

「恐らく、武田の本地だろう。武田もまさか、我等が戦時には数刻早く訪れる事になっているとは、さすがに勘づくまい」

景虎は暗闇に紛れ、にやりと口角を持ち上げた。「案の定、武田は我等が妻女山で待機するのを察し、のこのこと現れよつた。二つ煙が立っているところを見ると、奴ら二手に別れたな。両側から挟み撃ちするつもりだろう。攻めるなら今だ」

景虎は馬に乗り直した。

「わたしに続け！！敵は此方が動く事にまだ気付いていない。少し早まったが、霧が深まる前に出陣だ！！！」

才オ ……

天上で、月が見守る中、上杉軍は敵地を目指し、気付かれぬよう、静かに山を下って行った。

霧の合間から大群が覗く。

「あれは……」

「どうした」

見張りの者達が突如ざわつき始めた。

「た、大変です！！」

「只今上杉軍が、此方に接近中です！」

「な……？」

辺りは驚愕に包まれる。

「何故読まれた……？……皆の衆！直ちに応戦準備を！！」

信玄が汗を流しながらおらぶ。

「はっ！」

「御意！」

武田軍は、直ぐ様それぞれの持ち場に散って行った。

「さあ信玄……。始めようぞ。川中島の最終決戦をな……」

一、妻女山（後書き）

この度は、本作品を御覧頂きまして、誠に有り難う御座います。もし良ければ、感想などを書き込んで頂くと、跳んで喜びます。

二、龍と虎

山あいには轟く甲高い奇声と共に、両軍はついに激突した
：

「斬れ　　！！一人残らず上杉を斬りふせろ　　！！！」

信玄は軍配を掲げ、赤面になりながら叫んでいた。

そのため、背後から近づく敵に、彼は気付かなかつた。

「お館様　　！！！」

臣下の者の声に、信玄はようやく背後から近寄る気配に気付く。

周りにいた者達が、すぐさま止めにかかるうとしたが、どれも皆間に合わない。

「信玄　　！覚悟！！！」

罵声と共に、供もつけず、たった一人で武田の本陣に走って来た者　　景虎が馬上で刀を振り上げる。

「御免！！！」

景虎の刀が、素早く振り落とされた。

辺りが一瞬凍りついた。

「信玄様！！！」

「己れ上杉！！よくも……！」

武田の軍師達が次々と集まって来る。

さすがの景虎も、これ以上長居するわけにもいかない。

「……邪魔をした」

景虎は馬を走らせ、一瞬後にはもう遙か遠くに姿をくらませているた。

「信玄様!!」

信玄の周りに、幾人もの臣下達が群がってきた。

「…大事無い」

信玄は、景虎の消えていった場所を、強く見据えていた。

「景虎様!ご無事で!!」

「ああ。しかし虎は討ちそびれた」

「御無理をなされて……」

景虎は自分の陣地に戻ると、安堵する臣下達をよそに、次の策を練っていた。「現在の戦の進行状態は?今どちらが有利だ?」

景虎は近くにいた臣下の一人に尋ねた。

「はい。状態はどちらにも有不利はなく、今のところ半々だと……」

「そうか」

景虎は、信玄のいる武田の本陣を、強く見据えた。

(しかし信玄もあれでは戦には出れまい。これから暫くは上杉の有戦だ……)

妻女山近辺の山々で、その戦いは長らく続いた。

二、龍と虎（後書き）

本日は拝見頂き、有り難う御座います。いかがでしたでしょうか？
何か感想などがありましたら、お気軽にお書き込み下さい。

終、川中島の霧明け

その戦いは、両軍とも多数の死傷者を出した。
川中島の龍と虎は、結局勝敗のつかぬまま、四度目の川中島戦の幕を閉じた。

その後の越後龍は、というと……

「景虎様〜!! 何処においでですか〜!!!!」

あれはいつぞやの侍女の片方では……?

またか。あの者はよくわたしの眠りを邪魔するな。

……何か、あれに恨まれるような事をしただろうか……?

「お館様〜! 景虎様〜!!」

侍女は未だ景虎を探しているようだ。

……寝れん。

「……何事だ? あと、渡りでどたばたと騒ぐな」

仕方なく渡りに出ると、侍女は、はっとして振り返る。

「あら、申し訳ありません」

「して、何用だ?」

景虎はいかにも眠そうに目を細めた。

「あ、そうそう。先程侍女頭の部屋に、これが飛んできました……。」

とうの侍女頭は突然矢が射られたことで、只今失神中……」

侍女は懐から一本の矢文を取り出した。

景虎は静かにそれを受け取り、熟読した。

先日の合戦^{かつせん}、見事であった。よくぞ一人で敵陣に飛び込んだ。次の合戦を、楽しみにしておるぞ。

名前は無い。しかし、景虎には差出人がわかった。

「ふん……。わたしもだ、虎よ……」

ちなみに、その後龍と虎の争いが、両者の亡くなるまで続いたというのは、また別のお話。

もしかしたら、今もなお、川中島の何処かで、合戦は続いているのかもしれないが、それを知る者は、誰一人として残ってはいない。

そんな、戦乱の最中の物語 ……

終、川中島の霧明け（後書き）

短い連載でありましたが、最後まで読んで頂き、有り難う御座います。……序章、関係ありませんでしたね…。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3849c/>

関東管領職、越後の龍

2009年3月24日10時13分発行